大垣市のかわまちづくり～水辺空間に癒しと賑わいを～

大垣市役所都市計画課　主事　安藤　祥太

1．はじめに

令和5年度「かわまち大賞」を「大垣市かわまちづくり」が受賞した。この機会に、大垣市の水門川におけるかわまちづくりについて紹介する。

岐阜県の南西部に位置する大垣市は、豊富な地下水を利用し産業都市として発展してきた歴史を持ち、古くから「水の都、水都」と呼ばれてきた。現在も、市内各地には自噴井戸が点在し、日常的に水を感じることができる。

特に、中心市街地を流れる水門川は、湧水を水源に持ち、かつては大垣城の外堀としての役割を担っていた。その下流は川湊として栄え、国名勝に指定される「奥の細道むすびの地」もあることから、「水都大垣」のシンボル的な河川になっている。

図-1 中心市街地のマップ

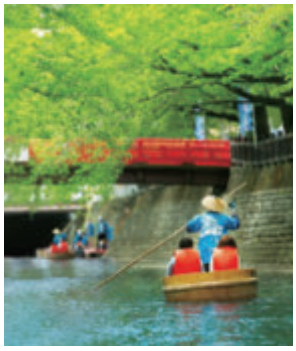
2．水門川との関わり

先に述べた水門川は、水都を象徴する川である。川沿いには「四季の路」と呼ばれる、全長2.2kmにおよぶ遊歩道が整備されており、大垣駅から俳聖・松尾芭蕉の「奥の細道」むすびの地となった船町湊跡まで、芭蕉の句碑や四季の花々といった、水と緑の空間を楽しみながら、芭蕉の旅を追体感することができる。

「四季の路」の風景

また、4月から5月には、和舟やたらい舟に乗って水門川を下る「水の都おおがき舟下り」、「水の都おおがきたらい舟」が開催されているほか、8月上旬には、豊富な水の恵みに感謝を込めて行われる「水都まつり」が開催されている。特に、たらい舟による川下りは、関ケ原の戦いの際、石田三成に仕えた武将・山田去暦（きょれき）の娘「おあむ」がたらいに乗って大垣城から脱出したという逸話にちなんでおり、歴史に触れることができるイベントでもある。

さらに、水都まつりの開催前には、水門川や遊歩道を清掃する「水門川クリーン作戦」といったボランティア活動が実施されるなど、地域住民のまちづくり活動の場としての面も持ち合わせている。



水の都おおがきたらい舟

水門川クリーン作戦

3．かわまちづくり計画と新庁舎の建設

大垣の歴史や文化、人々の生活とともに活用されてきた水門川だが、令和2年の新庁舎建設に向けて開催された市民ワークショップや意見交換会を通じて、水門川周辺の空間に対する様々な要望・意見があげられた。

例えば、市内には自噴水を活用した公園や河川敷を利用した河川公園はあるものの、中心市街地においては、河川と一体となった手軽に憩える公園が少ない点。旧庁舎とその隣を流れる水門川の間には散策路がなく、景観と回遊性を損ねている点。そのほか、子供たちが気軽に水遊びできる場所や井戸舟に触れることができる場所など、遊びと学びの場が欲しい、といった意見も寄せられた。

以上の意見を踏まえ、新庁舎建設に併せ、水門川の親水護岸と親水広場を一体的に整備する計画が立案された。新庁舎と水門川の間に散策路となるような空間を設けるとともに、もともと離れた場所に位置していた丸の内公園を親水公園として整備した。公園内には、周囲の緑と親和性のあるテラス席を設置することでくつろげる癒しの空間を生み出し、一方でイベントが開催できるようなステージも整備することで、ときには賑わいをもたらすことができるような空間を目指した。

図 -2 親水護岸と親水公園の整備

整備後の丸の内公園

4. まちなかテラス事業

新庁舎がオープンした令和2年は新型コロナウイルスが世界的に拡がった年であり、整備した水辺空間をうまく活用することが難しい年であった。そのような中、コロナの影響を受け、経営が厳しくなった飲食店を支援するため、テイクアウトや路上でのテラス営業に係る許可基準を緩和する、コロナ占用特例が国土交通省から発出された。本市では、この特例が導入された翌月より、大垣駅から南へと延びる駅通りの歩道とその周辺の歩道において、緩和措置に基づき飲食店などのテラス営業を支援する「まちなかテラス事業」(以下、まちテラ) を開始した。

まちテラの当初の目的は3密の回避による感染拡大防止と中心市街地の活性化であったが、コロナの収束に伴い、次第に公園や広場といった公共空間を利活用することに重点がシフトしていった。まちテラ開始時は、駅通りと駅の南北にある広場にて事業を実施していたが、現在では駅通りから歩いて回遊する際の動線となる大垣公園や丸の内公園においても実施しており、中心市街地エリアを一体的に活用している。

駅通りの歩道で開始したまちテラ

令和2年11月、まちテラの一環として、丸の内公園において「Marunouchi ランチボックスプロジェクト」を開始した。このプロジェクトは、公園にキッチンカーを呼ぶことで、コロナ禍のテイクアウト需要に応えるとともに、公園の利用も促し、憩いの場の創出を目指した社会実験であった。

売り上げや利用者へのヒアリング調査により、その効果を検証した結果、出店者・利用者双方に好評であり、毎週金曜日に「まるのうちテラス」として定例実施することとなった。この取り組みは現在まで継続しており、最近では市の職員に加えて、周辺企業や市民にも定着してきている。水辺空間において、ランチを楽しむことのできる場が生まれた。

まるのうちテラスの実施風景

5．かわまちテラス

令和4年4月、桜の開花に合わせ、丸の内公園から、水門川を南へ下った場所にある四季の広場までの水辺空間において、「かわまちテラス」を初めて開催した。このイベントは、水辺空間に新たな賑わいをもたらすことを目的としており、桜のライトアップやマーケット、丸の内公園にあるステージを利用したマジックショーなど、子供から大人まで楽しめるイベントである。会場には、木製のテラス席が設置されたほか、スピーカーから心地の良い音楽を流し、水辺を歩いて楽しめる空間を演出した。さらには、市内の大学に通う学生が未就学児向けの遊べる場を提供するなど、多様な主体が協働して空間創りに取り組むことができた。そして、多くの方々に非日常的な水辺空間を楽しんでいただき、また丸の内公園という新たな癒しの空間を創ることにもつながった。

かわまちテラス（令和４年４月初開催）

6．水都大垣再生プロジェクト

本市では、かわまちづくり計画とまちテラを契機とする水辺空間の利活用に取り組んできたが、令和5年度からは、さらに「水都大垣再生プロジェクト」という施策をスタートした。

冒頭述べたように、本市は「水（湧水）」に恵まれており、古くから「水都」と呼ばれてきている。一方で、近年の上下水道の整備による井戸の減少や、中心市街地の再開発などにより、水都を感じられる風景が減ってきている。そこで、水を見たり触れたりする機会を増やし、「水都を感じられる風景」を創り出すことで「水（湧水）」をさらなるまちの魅力づくりに生かす、「水都大垣再生プロジェクト」をスタートした。

水都大垣再生プロジェクトの開始

この事業の一環として、前項のかわまちテラスを令和5年7月7日から8日に開催した。開催初日である7月7日は川の日であると同時に、水辺空間の活用を盛り上げる「水辺で乾杯」の実施日でもある。これは、7月7日の午後7時7分に全国一斉に水辺で乾杯を行う、というものであり、本市ならではの取り組みとして、特産品である「木枡」と地酒を用いた「木枡で地酒による乾杯」を実施した。また、水門川でのSUP体験会や、音とムービング照明により水面を彩るレーザーアトラクションを実施したほか、キッチンカー・マーケットの出店や、護岸に木製のテラス席を設置する水辺のテラスなど、水に親しむ空間の創出を目指した。

「水辺で乾杯」の初実施

水門川で実施したレーザーアトラクション

こうした取り組みが実を結び、令和5年12月には「かわまち大賞」を受賞した。この賞は、全国各地の河川で進められている「かわまちづくり」の中から、他の模範となる先進的な取り組みを国土交通省が表彰するもので、令和5年度は本市のかわまちづくりの取り組みが選ばれた。

かわまち大賞の受賞により、水辺空間の利活用の認知や市民の事業への理解が広がるとともに、官民の連携も強まり、水辺の価値を向上するというメリットがあった。また、郷土愛の高まりといった点にもつながったと思われる。

かわまち大賞の受賞

7．今後の展望

最後に、水都大垣再生プロジェクトの今後の展望について述べる。

まず、現在、大垣駅南口において新たな井戸の整備を進めている。駅の改札口を出たところは、そのまちへ訪れた方が最初に目にする風景であり、まちの顔ともいえる。そこで、最初に井戸から湧き出る地下水を見てもらうことで、大垣が「湧水のまち」であることを視覚的に訴える。また、前出のマップ（**図-1**）を見てもわかるとおり、中心市街地には湧水スポットが数多くある。水門川沿いの散策や湧水巡りを通じて、「水都」を感じてもらいたい。

また、冒頭触れた散策路「四季の路」の再整備も進めている。季節を感じることのできる風情ある遊歩道だが、整備から30年以上経過しており、歩きにくい場所があるなど、回遊性を損ねる可能性があるからだ。そのほか、かわまちテラスのように、川沿いの低未利用地に新たな憩い・賑わいの創出を目指すなど、水辺空間の有効活用に取り組んでいく。

プロジェクト自体は3か年の計画であるため、最後の令和7年度に向け、目的を見つめなおし、効果的な事業を進めていきたい。

大垣駅南口に整備予定の井戸舟

8．おわりに

かわまちづくり計画の策定から始まり、新庁舎とその周辺の整備、まちテラ事業の実施、そしてかわまち大賞の受賞につながることで、水辺空間の活用については大きな弾みとなった。一方で、水都大垣再生プロジェクトについては2年目が始まったばかりである。中間年となる令和6年度は、プロジェクトのゴール、そして未来の河川空間の利活用に向け、改めて考えなおす時期だろう。歴史や文化、まちづくりに紐づく水門川を中心とした辺り一帯の活用、そして一人でも多くの市民が、水辺空間の新たな魅力に気付き、楽しめるようなかわまちづくりに取り組んでいきたいと思う。